

---

# テイルズオブジァビス ~ 短編小説集ですの~

緋音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テイルズオブジァビス〜短編小説集ですの〜

### 【Nコード】

N2915BA

### 【作者名】

緋音

### 【あらすじ】

此処には、テイルズオブジァビスの短編小説を置いて行きます。時系列はバラバラになります。

また、各話によって設定が変わりますので、各話の前書き、あとがきを参考にしてください。

厳しめ要素あり（ルーク、イオン、ミュウはたいてい除外）

## 朱と赤茶の本音（前書き）

ルークとアニスによる同行者＋灰廠しめです。

時期は外郭大地降格前後です。（多分）

この話のアニスはちゃんと仕事しています。（常識人）

また、この話のルークとアニス（イオンとミュウ）は真っ黒です。

## 朱と赤茶の本音

とある日の宿でのこと。

「なあ、アニス。誰もいないからちょっと話そうぜ」

朱は赤茶に話しかける。

同行者たちは買い物だのなんだの言っ出て出かけて行った。（イオンもミユウも）

朱は赤茶を宿の部屋に案内する。

「いいですよ。で、何を話します？」

「あいつら、あの同行者と灰について」

「ああ、あいつらですね。王族を馬鹿にする、自分で自分の寿命を縮めている馬鹿達ですね」

「ああ、そうだ！よく分かってるな」

「えへへ、アニス、ルーク様にあんな態度をとるあいつらが信じられなくて」

2人は楽しそうに話しているが、その内容はどこか棘がある（ありまくる）

「まず、ティ、じゃなくて襲撃犯！」

どうやら名前も呼びたくないようだ。

「あいつですかあ。想像力のかけらもない、自分こそ正義、と思っている馬鹿ですよお」

「だよなあ。自分が戦えるから俺も戦え。どこの国の常識だよ!？」

子供も戦うって、どんだけ非常時なんだよ!？  
と朱は続ける。

「ですよねえ。あいつの常識、微妙に世間の常識から外れてるしい」

「やっぱ、ユリアシティで育てられたからか？」

「でしょうね。あそこ、閉鎖的な街ですから」

「しかも王族にはタメ口。軍人には敬語。意味不明だ」

2人は厳しく、だが的確に悪いところを挙げていく。（存在自体悪いのかもしれないが）

「じゃあ、次。俺の使用人でジショウシンユウケンゴエイケン自称親友兼護衛剣士」

「・・・使用人と親友と護衛の意味を知らない馬鹿」

「お、簡潔にまとめたな」

「だって、そうじゃないですかあ。あいつの中での親友って、夜中に武器もってベットの横に立つ奴なんですよ」

「ああ、その通りだよ。しかも護衛しないし」

「ルーク様を前衛で戦わせることに異を唱えないなんて、護衛剣士失格ですよ」

実際に王族を前衛で戦わせてみる、即刻死刑だから。

赤茶はそう続ける。

「使用人とか言いながら、窓から入ってくるんだぜ。あり得ないだろう」

「ホントその通りですよ。ルーク様、よくここまで生きていましたよねえ」

「あいつの中では俺よりも、襲撃犯の方が大事らしいしな」

彼にそのつもりはないのかもしれないが、朱が罵られているのに、襲撃犯を咎めようとしない、それどころか朱が謝らないといけないなどと言いつつ出すのだ。

「じゃあ、次に死霊使い<sup>ネクロマンサー</sup>。」

「和平をぶっ壊すために来た馬鹿」

「おいおい、あいつは天才と言われてるんだぜ」

「お言葉ですがルーク様、馬鹿と天才は紙一重って言いますよ」

「あーなるほど！ありがとう。アニスのおかげで、俺また賢くなった」

「いえ、お礼には及びませんよう。それよりも話の続きをしまし  
う」

「ああ、そうだな。あいつ、敬語なのにどこか俺を馬鹿にしてるよ  
な」

「ホントは自分の方が馬鹿なのに、それに気付かないおめでたい人  
ですから」

「ああ、俺の演技も見抜けなくせに。『コレだからお坊ちゃまは・  
・』ああ、これは同行者全員に言えることだけだな」

「戦場以外では役に立たない、そんな人ですから」

「・・・あんなのが俺の生みの親なんて、最悪だ」

「ですよねえ。イオン様もおかわいそうに」

「まあ、落ち込んでもしようがないか。じゃ、次。偽姫」

「どう考えてもおかしい事なのに、それに気づかないこれまたおめ  
でたい人」

「紅髪と黒髪の間にとやったら金髪が生まれんだよ」

「しかも『お父様なら許してくれます』ですよ。王命に背いて許  
してもらうつもりなんですよ。信じられません」

「反逆者と、捕らえられてもおかしくないのにな」

「アツシュが『俺が被験者だ！』<sup>オリジナル</sup>といった瞬間、敵なのに仲良くし始めるし」

「何でおれよりも敵であるアツシュ、キムラス力を害したあいつを選んだ！？」

「きつと、記憶の有無ですよ。悲しいですけど・・・」

「じゃあ、最後、聖なる焰の燃え滓」

「外見も中身の鶏頭の弱虫」

「だよなあ。短気で口調が悪くて、そんなので一国の王が務まるわけねえよな」

「自分が死ぬ予言が終わった瞬間『そいつは劣化品だ！』<sup>レプリカ</sup>とか。ホント、逃げることしか能がない奴ですから」

「あー、俺って恵まれてねえよな。こんな奴らに囲まれて」

「でも、アニスちゃんと、イオン様、あとミユウはルーク様の味方です！」

「ああ、ありがとう」

「はうあ！アニスちゃん、もっと頑張ります！」

これが宿の一室で交わされた会話の一部始終だった。



## 朱と赤茶の本音（後書き）

実はこの話では、ルーク、アニス、イオン、ミュウは逆行してたりします。

ローレライを解放して、で、逆行。

みんな本編の3、4年前に逆行しました。

アニスは逆行後、前の自分の行動を起こさないように、努力しました。

で、この結果です。

**悪夢から逃げる方法**

**死ネタ（前書き）**

2話目が死ネタです（汗）

時系列はED後。

ジェイドが無自覚のうちに病み、死にます。

流血表現がありますのでご注意ください。

## 悪夢から逃げる方法

## 死ネタ

ルークは帰ってこなかった。

帰ってきたのは被験者<sup>オリジナル</sup>。

私は、こんな結果を望んでいたわけではない。

被験者<sup>オリジナル</sup>が帰って来てから、よく夢を見る。

その夢には2つの種類がある。

1つは、私が過去に殺した人たちが出てきて、私の存在を否定する夢。

もう1つは、仲間たちが出てきて、『何で大爆発<sup>ビックバン</sup>を回避できなかったんだ！？お前はフォミクリーの考案者だろ！？お前がもつと頑張れば、ルーク／俺は死なないで済んだかもしれないのに・・・』と、私を責めていく夢だ。

所詮夢だ。

なのに、これらの夢を見ると必ず怖くなる。

どうすれば、こんな夢を見ることもなくなる？

今日は死神デイストの処刑日だ。

あの戦いで唯一六神将で残った奴。

彼の処刑日。

処刑台にはデイスト、周りには民衆と、ピオニー、私がいる。

ネフリーは来ていない。

・・・処刑の時間になった。

デイストは何故か微笑んでいた。

誰に向かってでもなく、ただ微笑んでいた。

ピオニーは、デイストが死んでも表情を変えなかった。

少し悲しそうにしていたが。

何故悲しいのか分からない。

ルークが帰ってこなかったときだって、悲しくなかった。

少し残念に思っただけだ。

死んで何故悲しむ？

どうして？

・・・分からない。

それから私が見る夢の種類が増えた。

今度はデイストに責められる夢だ。

『貴方が協力してくれたら、ネビリム先生も

』

ほぼ毎日、どれかの夢を見る。

寝れないことは無い。

けど、怖い。

寝れば誰かが私を責める。

誰かに相談もできない。

いつからか、私はリストカットを始めた。

死ぬためではない。

不安を消すために。

これをするとなんかの間だけ不安がなくなる。

恐怖がなくなる。

私は第七音素が使えないため、左手首には幾多の切り傷が出来た。

でも、不安から、恐怖から逃げるためにはこれしかない。

今日も仕事を終え、家に帰ると服を着替える。

そして、机の引き出しから専用のナイフを取り出す。

それを右手に握りそつと、手首をこする。

血が流れ出る。

ああ、今日はいいい色だ。

しばらく見たら包帯を巻く。

ここまではいつもと一緒だ。

だが、何かがいつもと違う。

そうだ、いつもならこれで不安や恐怖が消えるのに。

今日は消えない。

怖い、怖い。

「・・・あ、や・・・いや・・・あああああ！！！！」

怖い、怖い、怖い！

「あああああああああ！！」

助けて、誰か、助けて！！！！

「ああああああああああああ！！！！」

この不安から、恐怖から助けて！！！！！！

「・・・・ハッ、ハッ、ハッ。私は、何、を？」

気付いたら、自分でナイフを胸に突き刺そうとしていた。

「・・・・これを、刺したら、楽になれますかね」

これを刺せば、きっと、不安も恐怖もなくなるはずだ。

私は胸にナイフをそつと突き刺す。

「・・・・あつ、うう・・・・」

肉を刺す感覚がよく伝わってくる。

「・・・・カハッ」

せせり上がってきた血を吐き出す。

「・・・・う・・・・」

私はその場に倒れる。

血がたくさん流れていく。

「・・・きれ、い、です、ね」

私は、目を閉じた。

きつと楽になれると信じて。

「  
なんだって!!??」

宮殿にピオニーの叫び声が響いた。

「ジェイドが、死んだ、だと？」

アスランが冷静に報告する。

「ええ、今日の朝、不審におもった近所の住人が通報してきました。  
家の中には大佐が・・・」

「・・・不審？」

「どうも昨日の夜、彼の叫び声が聞こえたらしいんです。まるで何かに怯えているような・・・彼は何に怯えてたんでしょう？」

「・・・夢、だろうな」



「夢、ですか？」

「俺には分かる。きっと、あいつは悪夢を見てたんだろう。だから、逃げた……」

「……悪夢、ですか」

「くそっ、勝手に逃げやがって、死にやがって……！」

ピオニーは声を上げずに泣いた。

「……サフィールが、死んだ、あとに、お前、ま、で死に、やがって。俺は、お前等の、分ま、で生きて、やる」

ピオニーは泣き、悔やみ、決心した。

たくさん生きてやる、と。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2915ba/>

---

テイルズオブジァビス～短編小説集ですの～

2012年1月10日19時55分発行